5　『太平記』の記録・康安の大地震

(1)　康暦の碑

東由岐にある町内ではもっとも有名な碑。高さ一・六メートル、幅七〇センチメートル、厚さ一〇センチメートルで砂岩の板石でできている。

『太平記』によると康安元（一三六一）年の大地震大津波についてつぎのように記している。

『康安元（一三六一）年六月十八日巳刻より同十月に至るまで大地夥しく動いて日日夜夜に止む時なし、山は崩れ谷を埋み、海は傾て陸地に成しかば、神社仏閣倒破れ牛馬人民の死傷する事、幾千万と言数を不知……中略……中にも阿波の雪湊（由岐みなと）と言う浦には俄に大山の如くなる潮張り来って在家一千七百余宇、悉く引潮に連て海底に沈しかば、家々に在る所の僧俗男女、牛馬鶏犬一も不残底のみくずとなりにけり』、又この記事の中には、今の大池の事か、その地裂け長さ二百貳拾歩其徑百歩の大きな池となったとの項もある。（『太平記』巻第三十六『大地震並に夏雪の事』より）

この康暦の碑は康安の大地震、大津波により、命を失った多数の人たちの霊を供養するために地震より二十年後

の康暦二（一三八〇）年十一月作られたもので、東由岐イヤ谷の中腹に大池を正面に見ながら立っている。

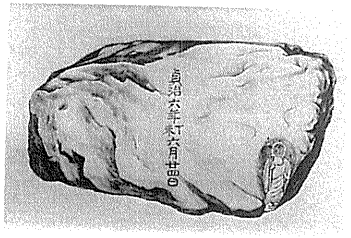
この地震は今で言うマグネチュード八・四。大阪四天王寺の金堂倒潰、奈良薬師寺金堂、招提寺塔の九輪大破、紀伊熊野社悉く破壊と記録されている。（東大出版『日本被害地震総覧』）

畿内、阿波、土佐にまたがる大地震で、当時は朝廷も南北朝に分かれ、足利尊氏の死後、筑後川の戦あり又、南朝方が京都に攻入り将軍義詮は近江に逃れるなど、世の定まらぬ時代であった。

山崩れ大地の裂ける稀有の大地震に見舞われた私たちの祖先の村人たちにとっては、毎日のなりはいとてままならぬ苦難にみちた一時代であったに違いない。

(2)　貞治の碑

西の地の中央、子安地蔵さんの堂内に安置されている石碑。高さ八〇センチメートル、幅一メートルの砂岩の浜石でできている。碑の中央に貞治六年六月二十四日の紀年銘、右下隅に延命地蔵尊の浮彫りがある。



安政地震（嘉永七年十一月）の際、浜の堤防に築き込んであったのだが光って仕方ないので信仰深い人がこの地に地蔵庵を建立し安置したといわれている。それ以来、張の地蔵さんとして庶民の信仰をあつめ、毎年旧正月二十四日には付近の海岸一帯に出店が並び相撲などもあってにぎわったといわれている。

貞治六年（一三六七年）は康安の大地震から六年目で、震災供養のため造られたのかもしれない。

4　東由岐「当屋帳」の記録から

上の「当屋帳」は東由岐中野直保氏が所蔵していたもの（現在町教育委員会保管）で、天明初年（一七八一）から大正十三年（一九二四）までの諸行事や主な出来事などが記録されている。その中から抽出したもので（天明の分欠落により『三岐田町史』から）これはその原文で

ある。

ただし、原文で足らぬところや誤りは括弧内で正し、わかりにくいところは右側へふりがななどつけてわかりやすくした。（以下全項目につき同じ）

①　大谷公と藩主のお成り

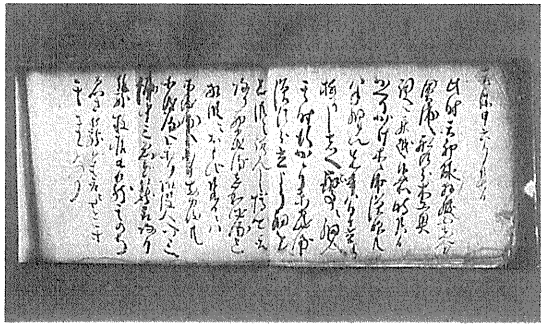
天明二年（一七八二）六月に蜂須賀家十代の藩主を隠居せられた大谷公重喜が、また寛政三年（一七九一）九月には十一代藩主治昭の御成り（お出かけ）があったことが記されていた。（この項欠落につき大正十四年発刊、『三岐田町史』による）

（原　文）

大谷公御成
寅ノ六月廿八日
大谷様御成ニ付役船
一、椿泊へ　重左衛門
　　加子若者
右弐艘之分拾壱人
　牟岐送リ弐ッ宛也
同　日
一同椿泊へ　善四郎
　右同断（同様のこと）
寛政三戌年太守（藩主）御成

九月廿四日　市右衛門船
一、太守様御成ニ付御郡様椿泊迄御送り御用ニ付若物（者）
九人御用迄加子（船のり）船共用意仕候以上
九月廿五日
孫右衛門船
庄兵衛船
長左衛門船
善四郎船
太守様御成船椿泊迄漁船ヲ以御荷物送リ御郡御手代様與御
荷物裁判人様共送リ船
　但し壱艘ニ若物（者）拾人宛
九月廿五日都合五艘

九月廿八日　勘三郎船
一、牟岐送り　船附共
加子　安兵衛
加子　甚吉
加子　次郎右衛門
加子　庄五郎
メ



東由岐「当屋帳」

御成被遊候時御用相済
太左衛門
同久兵衛
同傳吉
同善七
同勘右衛門
相済申候

（注）以上の外時々御成があったと思う、と『三岐田町史』は記している。

②　天神社祭礼の当屋の定め

文政九年（一八一八）六月、今から（平成三年）およそ一七〇年あまり前、天神社祭礼のまつり物について当屋の役目を定めた記録である。

天神社が勧請されたのは正徳四年（一七一四）であるからそれ以来こうした定めはつづけられて来たものであって、当時の浦中の行事としてはこのお祭りが年中で一番大きな行事であったと思われる。

天神社の神輿ができたのは勧請後二年目の享保元年（一七一六）という記録があり、それ以後年に一度のお祭りに家々では当時の貧しいくらしの中、餅をつき、すしなどつくって楽しみ、また境内では人形浄瑠璃などの催しでにぎわったであろうと想像される。（上の写真参照）

この記録は祭礼にあたって当屋が天神社をはじめ境内の小社へお供えする鏡餅のことおよび、関船、だんじりへの賄いなどの役目を書き留めたものである。

文政元寅六月
天神様當屋
右天神様當屋定之義は去ル酉年六月より相定候且當屋船頭共拾弐人祭禮まつり物之義は鏡糯として糯米五升地下より出ル天神様へ弐重又戎様へ壱重荒神へ壱重右天神様へ祭り候鏡糯壱重ハ別當へ上る又壱重ハ地下中へ配、九月祭礼糯米壱斗三升地下より出る但し関船だんじりへ糯壱重宛祭ル内盛肴地下より出る其外拂米（祓い米）初穂（神前にそなえるおはつほ科）地下より出る。
且鏡糯荒神様戎様龍宮様壱重宛祭ル

③ 東由岐浦と木岐浦の漁師の争い

天保七年（一八三六）六月二十七日東由岐浦の船頭達が天神社の普請のため現在の海部町奥浦へ木工具を買求めに行き、翌二十八日その帰りがけに木岐浦の漁師が由岐沖の沚へ八田網を入れておるところを見つけた。これは先程の八月十六日にこの場所へ網を入れてはいけないととり決めていたのに、これに反して毎日入れていたもので、丁度そのときに行きかかった。そこで東由岐の船頭達が怒って網を揚げだんだん口論し樽を取って帰り、西由岐浦、志和岐浦へこのことを話し、翌二十九日に西由岐の者達が木岐浦へ行きお役人に伝えて餌籠を十九取って帰ったが、その後木岐浦からは何の申入れもなくそのまま事済みとなったということである。

ちなみに、天神社の普請はこれから九年後の弘化二年（一八四五）に竣工し六月二十五日に遷宮が行なはれている。時の大檀那、庄屋瀧文治郎（天神社棟札による）

天保申六月廿七日
此時天神社様拜殿ふ志ん（普請）ニ付奥浦へ船頭ら木工具調へニ罷越候所、明廿八日かへりがけ木岐浦漁師共八手網ヲ以先年八月十六日より極まりし志（沚）へひ事（日毎）ニ網入其時行かゝり東由岐浦漁師ら立より網を上（揚げ）段々路（論）んじ樽を取帰り西由岐浦志和岐浦迠相談ニおよび廿九日ニハ両由岐共木岐浦へ参り御役人へつたへ浦中之えど籠取り帰り籠数拾九籠其のちえさ籠とも取にもこず其まゝなり

④ 嘉永七年地震と津浪のこと

嘉永七年（一八五四）十一月四日、当日午后二時頃少々の地震があり海も少し高潮となったので、これは津波にちがいないと浦中で騒ぎ、家の大事な物を裏山へ持ち運び、その日は山で一夜を明かした。翌五日朝は何事もなかったので、みんなで話し合い家財類を昼頃までにまたわが家へ持ち帰った。

ところがその日の午后四時頃、大きな地震がおこり大騒ぎとなり、皆あわてうろたえて鍋釜など山へ持ちはこぶものもあり、大事な金銭を忘れて逃げたものもあり、その直後に大山のような津浪が押し寄せ、皆急いで山へ逃げ上がった。このとき強欲な人は皆流され欲を捨てた人は助かった。

翌六日、浦中はほとんどの人達は家もろとも家財道具を流されて食べるものもなく、たちまちの生活に困ったので日頃気安くしていた小野、辺川、福井、下原、廿枝などのとえさん（年中人糞を汲みとって貰うことを契約している農家、農家はこれによって田畑を耕作し、その礼として年末にもち米など渡してした）をたよって七、八日間世話になった。

そのうちお上（徳島藩）からお達しがあり、お手当米が下げ渡され、また小さな家も建てられ、漁師には船を、網元には網船、諸道具を、商人には家を建て、この拝借資金を二十か年に返納するようにとり計らわれた。

なお、この津浪で流されて死亡した人は東由岐浦で二十四、五人であった。

また、このときの米の相場は八十目位、麦は六十目位であったと記されている。

ちなみに、この地震津浪は海部郡沿岸一帯におよび、大きな被害をもたらした。本町内でも各地域にだんだんこのときの記録が残されている。

（原　文）

嘉永七年寅拾月（拾壱月の誤り）四日の昼八ッ頃少々地信（震）ゆり又は汐少々上り地下中ふしぎに思ひ（い）扨ハ是こそ津浪ニ間違無（き）為油断無く家物山ゑ（へ）持上り何角（に）至（る）迄持はこび其夜山ニ而夜明し明る五日人々寄集り色々の咄其日の昼迄は又家の物我家ニ持帰り何事もなし比時さより少々宛あり又は西由岐浦宮ニ而角力けいこ有（り）それを見に行（く）人有（り）もはや七ッ過（午後四時すぎ）頃に成（り）大地信（震）ゆり又ハみな〳〵大井に（大いに）驚きいさん（いちど）に東由岐浦へ走りみなうろたへて物はこぶ様なしうろたへてなべかま持はこぶ物（者）有（り）又はやくにもたゝぬ物山ゑ（へ）持ち上がり物（る者）有（り）大事の金銀をハすれ（わすれ）てぬげ行（く）物（者）も有（り）とやこふ（とやかく）云（う）内早汐引（き）沖を見れば大山よりも高き成（なる）大津浪押寄せ早（く）山ゑ（へ）ぬげ（よ）早く〳〵と大勢の聲皆夫々にぬげ上り（る）比時ごよく（強欲）な人みなながれよく（欲）を捨（て）たる人ハぬげ行（き）をふせ（おおせ）たり

尤此事相心得可候尤其夜は山ニ而夜明し明る六日の朝喰物もなし皆我とへ小野辺川福井下原廿枝郷々とへ殿の世話に成（り）七八日もくらし（す）内御上より御使と有（つ）而皆々ろこへも（どこへも）行（く）事相叶ハぬ御上ゟ御手當米被仰成又は小家御立被成候又は漁師中へふね作（造り）被成候又漁頭網船壹所（諸）道具下成（被成下）何角ニ至（る）迄御拝借被迎付難有仕合又商人中へ家建被成御拝借として三百目宛此返上廿ケ年ニ上納仕候事尤此時之御郡代様高木真蔵と申人也

右之通此帳面ニ書附置候此後無油断相心得可被成候

尤此時米八十目位麦六拾目位ニ御座候尤東由岐浦ニ而流人廿四五人相ながれ候

▷嘉永地震記文石灯篭（木岐・白浜）

	一家数	無難	大破（小破）	潰家	流失	流死
西由岐村	40	10	3	27		
西由岐浦	205	3		3	199	16
田井村	40	17	16		7	
木岐浦	203	7	6		190	
阿部浦	160	97	16（47）	4		
（ママ）伊佐利浦	〔特に疼みは御座なく候〕					

・史料　安政の大地震と由岐―「大地震実録記」に見る―

一八五四（安政元）年十一月四日の朝、辰の刻、前代未聞の大地震がおこり、大災害となったことはよく知られていることである。しかし、この由岐の浦村に当時どれだけの人家があり、どれだけの被害をうけたかとなると、即答できないのではなかろうか。そこで、「大地震実録記」（『御大典記念・阿波藩民政資料』所収）から、由岐地域の被害状況を紹介しておこう。当時の見廻り役人はつぎのように報告している。（意訳紹介）

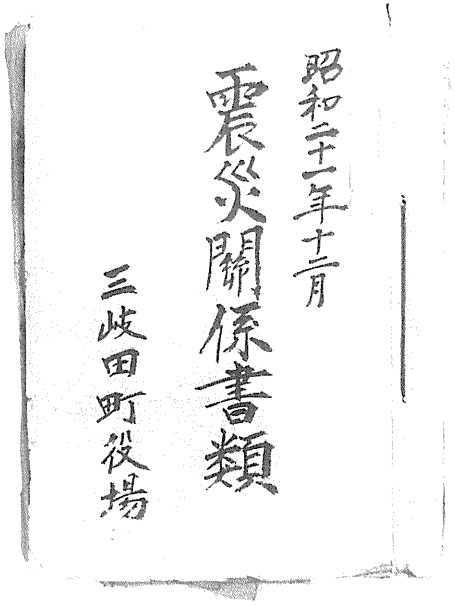
安政二年二月二十四日に、南方の地震・津波の疼み状況について我等見廻り人が見分に出向いたところ、西由岐浦の町ぎわの浜で二丈三四尺位の津波、海ぎわの堤切口では五尺ほども津波によって掘りとられ、また二抱えほどもある大木が根こそぎ引き抜かれ流されている。潮が行き留った山詰めでは四丈位の高潮が打ち寄せた跡が残っており、諸木・草はすべて枯れてしまっている。流失した家の跡を見てもすべて、石垣までも引き荒らし家跡の境目さえ分からなくなっている。家を流されてしまった人々は、山の上に小屋を立てむしろや板などで雨露をしのごうとしているがとてもでない惨状である。

由岐の被害状況は上の表の通りである。

(3) 南海地震の概況

戦後まだ日も浅い昭和二十一（一九四六）年十二月二十一日午前四時十九分、突如として大地震が発生した。この地震は紀伊半島南方沖合の海底を震源とするもので、最大震度六の激震が海部郡沿岸の由岐町（当時三岐田町）をはじめ日和佐、牟岐、浅川の各町村におよび、このあと約十分後津浪の来襲によって大きな被害をうけたのである。

この津浪を町内各地域の住民はいち早く予知し、夜明け前の薄暗い中を神社や寺の境内または裏山などの高所へ



大勢駆け上って避難した。その直後、もの凄い津浪がごうごうと押し寄せてきた。東由岐、西の地、西由岐、木岐地区の海岸に近い住家は殆んど軒下まで浸水し、ばりばりと不気味な音を立てて家々の家具家財類が流失または損傷して大混乱状態となった。港の大小の漁船は堤防や道路の真ん中へ押し上げられ、街中はどこもガラクタで埋まるなどの惨状となった。この大きな災害をうけて各戸ともちょうど寒気に向っての時期で、家屋その他の復旧作業に相当長期にわたって苦労し不自由な生活がつづいたのである。

このため県から海部地方事務所を通じて災害救助法による見舞金、食糧費、被服費などが支給され、その後も相次いで救助物資の支給があった。また、駐留していた連合軍よりの軍用物資の給与、日本赤十字社その他から衣料品、近県都市からの義捐金や救援物資が次つぎ町役場に送付され、その都度被災地の各部落会を通じて被災者に配分された。この状態がしばらくつづいた。そして被災家屋が徐々に修復されようやく生活に落ちつきをと

り戻したのは約一か年後であった。

この災害による被害状況は概要次のとおりである。（町役場保存「震災関係書類」による）

南海地震津浪による被害状況（旧三岐田町分）

死亡者　八
重軽傷者　二四
家屋の流失（住家倉庫等）　四八
〃　全壊（〃　）　六六
〃　半壊（〃　）　二二〇
〃　破損（〃　）　三九五
〃　床上浸水　六一八
〃　床下浸水　七〇
船舶の流出（大小）　三九
〃　破損（〃　）　一〇〇
耕地の浸水被害　田　二一町七反五畝
　　畑　五町一反六畝
その他
由岐～木岐間鉄道路線屈曲（列車一時不通）
埋立地等の路面亀裂など

なお、志和岐および旧阿部村では人家に被害はなく漁船に被害があった程度である。

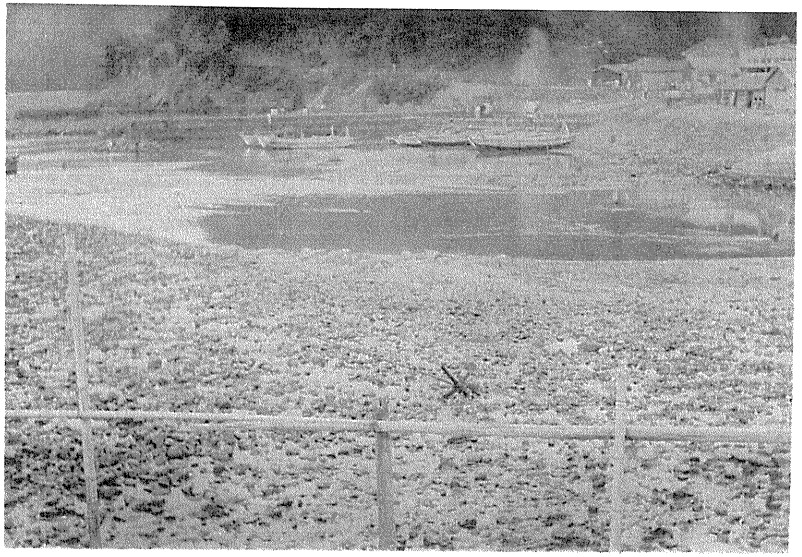
この災害を後世に伝えるため昭和五十七年九月、町教育委員会において町内次の四か所に南海地震津浪最高潮位標示石柱を建設した。

東由岐天神社下　西の地由岐保育所前　西由岐公民館前　木岐公民館前

高

(19) チリ地震による津浪の襲来

昭和三十五（一九六〇）年三月二十三日、南アメリカ



チリ地震の津波で異状に潮が引いた木岐港

のチリに地震が発生して翌二十四日県内沿岸一帯を津浪が襲い、阿南市では橘町を中心に浸水による大きな被害をうけ災害救助法が発動された。この津浪による県下の被害総額は七億四、二〇〇万円にのぼった。

本町では由岐港埋立地の港町が津浪の来襲によって地上三〇センチメートルほど浸水した程度で格別の被害はなかった。

木岐港でも高潮となった。この写真はそのとき木岐港で津浪が引いたときの状況である。

(20) 臨時、「田井の浜」駅できる

田井の浜が海水浴場と大海亀（アカウミガメ）の上陸地として多くの人に知られるようになったのは昭和のはじめ頃からで、当時の観光協会や有志のあいだで活発な宣伝活動がなされていた。絵はがきには田井の浜海水浴場と大海亀の産卵場面などが目玉の絵として組み込まれ、生田仁誠堂と黎明会（岩野商店）からの二組が売り出され、人気があった。

昭和十四（一九三九）年に国鉄牟岐線由岐駅ができて人の出入りが繁くなるにつれ、白砂青松の田井の浜と良